

「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代」(11:8~22)

■ヘブル人への手紙の構成

二つの主要な区分	内容	箇所	警告
第一区分： 神学的理論を中心に (適用としての警告 も含む) ユダヤ教の三本柱と 御子との比較	テーマ	1:1~3	
	天使たちに優る御子	1:4~2:18	警告① 2:1~4
	モーセに優る御子	3:1~6	
	第二の警告	3:7~4:13	警告②
	アロンに優る御子 (レビ族アロンの家系の祭司 職に優る御子) 注①	4:14~10:18	警告③ 5:11~6:20
第二区分： 適用(御子の優位性を 理解した上での、信者 の歩み)	勧めのための2つの基盤と4 つの勧め、警告、励まし	10:19~39	警告④ 10:26~31
	旧約の信仰者たちの生き方を 手本とする	11:1~40	
	信仰をもち続けることの勧め	12:1~29	警告⑤ 12:25~29
	まとめとしての勧め	13:1~25	

注① レビ族アロンの家系の祭司職 ⇒ 以下、「レビ系祭司職」

■「旧約の信仰者たちを手本とする」11章の構成

細目	内容	箇所
信仰の忍耐	信仰の特徴	1節
	このような生き方が可能であることを実証した人々がいる	2
	目に見えないものを確信する事例=天地創造	3
族長時代以前	アベル	4
	エノク	5~6
	ノア	7
旧約の信仰者たち (時系列で)	族長たち	8~19
	イサク	20
	ヤコブ	21
	ヨセフ	22
荒野の旅	モーセの両親	23
	モーセ	24~28
	イスラエル民族の人々	29~30
	ラハブ	31
試練の中で	イスラエル国史に見る信仰(士師たち・王たち・預言者たち)	32~34
	信仰は死を乗り越える	35~38
信仰の勝利		39~40

■ 前回の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代」① (11:8)

手本となる生き方	内容	箇所
神の召命を受けて 生まれ故郷を離れる	アブラハム (使徒 7:2~5、創 11:31~12:7)	8

1. 大洪水の水が引き、箱舟はアララテ山上にとどまった (創 8:4)。ノアの息子は3人、セム、ハム、ヤベテ。彼らから人類の諸民族が分かれ出ることになる。
2. 箱舟を出た人々はアララテ山の東へ移動し、シヌアル=ユーフラテス川とティグリス川の間にはさまれた地域 (メソポタミヤ地方) に定住した (創 11:2)。
3. 人類最初の権力者となったのは、ハムの孫ニムロデ。ニムロデは、シヌアルの地のバベルに、彼の最初の王都を置いた (創 10:10)。
4. 人類はそもそも単一言語であったが、バベルの塔事件により神は人類の言語を分けて互に通じないようにした。これにより人々は言語の通じる同族で集まりつつ、全地に散っていった (創 11:1~9)。
5. シヌアルの地を出たニムロデは、アシュル (ティグリス川の上流域) に移動し、ニネベを王都とした (創 10:11~12)。しかし、この地域は、セムの次男アシュルの子孫が支配するようになる。この地域を「アシュル」と呼ぶようになるのは、その結果である。アシュル地域は、のちの強国アッシリアの国土 (首都はニネベ) となる。
6. バベルの塔事件の後、シヌアルの地は、セムの三男アルパクシャデの子孫が支配するようになった。彼らはカルデア人と呼ばれるようになる。後の四つの覇権国家の第一番目、バビロニア (首都バビロン) の国土となる。
7. セムの長男エラムの子孫は、バベルの東の地域エラム。エラム地域には後にヤベテ系の民族ペルシア人が来て、スサに城塞都市を築く。後の四つの覇権国家の第二番目ペルシアは、スサを王城として維持しつつ、帝国統治の首都はバビロンとする。
8. 四男ルデの子孫はアシュルの地域内にいたが、後に小アジアに進出し、リディア国を建てる
9. 五男のアラムは、ユーフラテス川上流域からダマスコにかけてのアラム地域に展開する。アラムの子はウツはじめ4人 (創 10:23)、アラム・シリアの諸族になる。
10. 創 10:21 「エベルのすべての子孫」。「エベル」は「ヘブル」の語源。ヘブル人のルーツの紹介。セム→アルパクシャデ→シェラフ→エベル (創 10:24)。
11. エベルの名で呼ばれる三つの地域がある。「パダン・アラム (アラムの平地)」 (創 28:2)、アラム地域の中の「ハラン」 (創 27:43、11:31)、ハランから約1000キロ離れたカルデア人の地の「ウル」 (創 11:28)。
12. セム→アルパクシャデ→シェラフ→エベル→ペレグ→レウ→セルグ→ナホル→テラ→アブラム。エベル以降が、ヘブル人である。
13. アブラムの生まれ故郷は、アラム地域のハランである (創 12:1)。モーセがアブラハムのことを「さすらいのアラム人」 (申 26:5) と言ったのは、アラム地域のハランの出身であるという意味。セムの五男アラムの子孫というわけではない。「さすらいの」とは、創 20:13、神の召しに応答して行先を知らずに旅をしたことを指す。
14. テラはアブラムを連れて、ハランからウルに移住した。ハランもウルも、月神信仰の中

心地。テラの家族の名前には、月神信仰の影響がうかがえる。テラは「昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた」(ヨシュア 24:2)。

15. ウルに住んでいたときに、神がアブラムに現れて1回目の召命(使徒7:2~3)。出発するも、父テラの意向によりハランで止まった(創11:31)。
16. 2回目の召命は、ハランにて、父の死後(使徒7:4、創12:1~3)。アブラムは、ただちに応答して出発した(創12:4)。アブラム75歳。

前回の補足

1. ハムの子らは、バベルの塔事件の後、どこに行ったのか(創10:6)。
 - (1) クシュ・・・ヌビア(北アフリカ、スペインの対岸地域)とエチオピア
 - (2) ミツライム・・・エジプト
 - (3) プテ・・・現在のソマリアとリビアの一部
 - (4) カナン・・・カナンの地。カナン人は民族的にはハム系であるが、セム系の言語と文化を受けている(F博士、211頁)。
2. クシュの子孫は、さらに、セバ(青ナイルと白ナイルの間の地域)、ハビラ(アラビア南部)、シェバ(アラビア南西部、現在のイエメンのマリブ)、デダン(サウジアラビア北西部、エル・エラのオアシスの付近)など。
3. ヘブル11:8
 - (1) 「出て行けとの召しを受けたとき、これに従い」・・・「従う」という^ギ原語は、「ためらわずに直ちに従う」という意味。
 - (2) 「どこに行くかを知らないで」・・・神は目的地を明らかにせず、「出て行け」とアブラムに告げ、アブラムは神が止まれと言うまで移動を続けた。
 - (3) アブラハムは、信仰をもって人生の旅路をたどる者の手本である。

■ 今回の内容 「旧約の信仰者たちの手本」の「族長時代」②(11:9~16)

手本となる生き方	内容	箇所
神の召命を受けて 生まれ故郷を離れる	(使徒7:2~5、創11:31~12:7)	8
寄留者となる	(創13:18、22:19、23:4、24:67、25:27)	9
	(創24:7)	10
不可能でも子が生まれると いう約束を信じる	(創17章、ロマ4:17~22、創18:1~15)	11~12
目の前の土地ではなく、より 優る国を求める		13~16
イサクを捧げることを通して、 復活を信じる	(創22:1~18)	17~19

寄留者となる (11:9~10)

1. 9節

- (1) 約束された地に、他国人のようにして住んだ。
- 「住んだ」・・・**ギ**原語は、「他国人として、仮住まいで住む」の意味。
- (2) イサクやヤコブとともに、天幕生活をした。
- ① アブラハムは、75歳で約束の地に入り、175歳で死ぬまで、天幕生活をした。
(創 13:18、22:19)
 - ② アブラハム契約の約束を継承したのは、彼の子イサク、そして孫ヤコブ。彼らもまた、天幕生活をした (創 24:67、25:27)。ヤコブが生まれたとき、アブラハム 160歳
 - ③ アブラハムは堅く信じていた。約束の成就までどんなに長くかかろうとも、神の約束は必ず成就する。たとえ自分がいったん墓に入ることになろうとも、そのときは復活を経て、必ずいつの日か、この地を所有する。

2. 10節

- (1) 彼は、[目の前の約束の地を超えて]、ある一つの都を待ち望んでいた。
- (2) その都は、神が造った堅い基礎の上に建っている。
- (3) アブラハムが望み見ていたのは、天の神の都である。神が設計者であり、建設者である都である (参考、創世記 24:7「天の神」)
- (4) この手紙の中では、この後、3回、この都について語る。
- ① 11:16 「天の故郷」・・・後で説明しますが、原文の意図は「天の国」
 - ② 12:22 「シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム」
 - ③ 13:14 「永遠の都」
- (5) 天のエルサレムについて、さらに詳しくは、新約聖書の黙示録 21:1~22:5。
- (6) アブラハムが究極の約束の地として信じていたのは、天の神の都であった。
- ① 天の神の都は、「カナンの地」に加えて与えられるものである。
 - ② 天の神の都は、カナンの地の領域内にはない。
 - ③ 天の神の都を持ち望むことが、アブラハムが信仰の忍耐を發揮した秘訣である。

不可能でも子が生まれるという約束を信じる (11:11~12)

1. 11節

- (1) 信仰によって、サラは「子を宿す」力を与えられた。
- ① **ギ**原語は、きわめて具体的な表現「精子を託す」。これは男性側の行為を示す。
 - ② よって、「信仰によって」とは、アブラハムの信仰によって、という意味。
- (2) アブラハムの信仰によって、サラは子を宿す力を与えられた。
- (3) サラはそういうアブラハムと信仰によってひとつとなった。アブラハムは、サラと共に、子を宿す力を得た。サラはすでにその年を過ぎた身であった、すなわち月経がなくなっていたのに。

(4) 「サラは約束してくださった方を真実な方と考えた」

- ① サライが、自分の女奴隷ハガルによって子を得ようとしたのも、信仰から出たことである。サライは、神がアブラムに子を与えるという約束を信じていた。同時に、自分が子を産まないことは神がそのようにしておられるということを理解していた(創16:2)。したがって、カナン^①の地に来て10年経過した時点で、サライは自分の女奴隷ハガルを通して、子を得るという当時では当然の対応を選んだ(創16:3)。翌年、イシュマエル誕生。アブラム86歳。
- ② アブラムもサライも、神がサライを**実母**として子を与えるご計画であることまでは理解していなかった。
- ③ 創17:15~16 アブラム99歳。神がサライをサラと名を変え、彼女によって男の子を与えられたとき、アブラムは心の中でそれを疑った。来年自分は100歳、サラにしても90歳、もう子を産める体ではなかったからである。
- ④ 創17:19~24 アブラムの心の中をご存知の神は、もう一度約束のことばを告げられる。今度は、アブラムは信じた。そして神の命令のとおり、アブラム契約のしるしとして、割礼をその日のうちに実行した。
- ⑤ 創18:2 その後間もなく、3人の人が訪れる。ひとは主ご自身【第二位格の子なる神】(創18:33、19:24)、あとの二人は天使(創19:1)。このとき、サラはアブラムと主との会話を、自分の天幕の中から聞いた。その内容は、来年の今ごろ、サラには男の子ができていとのこと、サラは心の中で笑ってこう言った。「老いぼれてしまったこの私に何の楽しみがあるろう。それに主人も年寄りで」(創18:12)
- ⑥ この3人の訪問のときに告げられた宣言は二つ。一つは、サラに男の子が生まれるということ、二つめはソドムとゴモラに神のさばきが下って滅ばされるということ。二つめは、この後すぐに現実となった。ソドムとゴモラが主のことばのとおり滅亡したということは、サラの中で、一つめの宣言「サラに男の子が生まれる」も必ず成就するという信仰を形成させた。

2. 12節

- (1) そこで：11節で見たアブラハムの信仰の結果、どうなったかを示す。
 - ① ひとりの人から、しかも死んだと同様の(=年老いて、生殖能力が無くなった)アブラハムから、
 - ② 天の星のように、また海べの数えきれない砂のように数多い子孫が生まれた。
- (2) アブラハムは、ユダヤ民族の父となっただけではない。その他の諸民族、とくに現在のアラブ諸国につながる人々(イシュマエルの子孫、創21:13、18、21、25:12~18)の父でもある。

目の前の土地ではなく、より優る国を求める (11:13~16)

1. 13節

- (1) これらの人々 (アブラハム、イサク、ヤコブ) は、その生涯の中では約束の成就を見ることなく、死んだ。
- (2) しかし、彼らは、はるかにそれを見て喜び迎えた。
 - ① 彼らは知っていた。もし自分が死んで、神の約束がまだ成就していないとしたら、その約束は自分の次の人生において必ず成就する。
- (3) 彼らは、喜んで当時の生活を送っていた。「自分は外国人であり、信仰の旅人です」と告白しながら (創 23:4、20:13)。
 - ① 外国人として、彼らは外国で市民権もなく住んでいた。
 - ② 信仰の旅人として、彼らは確固とした所有権のものを何も持たなかった。
 - ③ 彼らは、喜んで待っていたのである。次の人生において受ける褒賞を。

2. 14節

- (1) 彼らは、自分のことを外国人であり、信仰の旅人であることを告白することで、何を表明していたのか?
 - ① 「自分の故郷」ギパトリス、直訳すると「父の国」
 - ② 天の父が用意してくださっている天の神の国を、自分の生涯を通して求めていくこと。
- (2) 彼らがパトリスの地に立つ日はいつなのか?
 - ① マタイ 8:11 千年王国が始まる時
 - 食卓に着く = ギ後ろによりかかる、横になる

3. 15節

- (1) もし彼らが待つことに疲れてしまったなら、彼らはいつでも自分が出て来た元の所 (ウルやハラン) に戻ることはできたはずである。
- (2) 信仰の人生は、元の所で築き上げたことや元の所で得ていた楽しみや慰めを、喜んで捨てることである。そして信じた日からの人生を、より良い約束のために、あえて不都合な状況になっても、よしとすることである。
- (3) 彼らは約束の大半を受けることはなかったが、それを待ち望み続けた。

4. 16節

- (1) 彼らは、より良い国 = 天の神の国を受け継ぐことを知っていた。
- (2) 彼らは、いつの日か、天の神の都の中に住むことを知っていた。そこは、地上のいかなる場所よりもはるかにすぐれた所であると確信していた。
- (3) この希望によって、彼らは、元の所に帰ることはせず、喜んで待ち続けた。
- (4) そのゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥となさらなかった。
 - ① 原文は、次の2つの内容
 - 神は彼らを【兄弟と呼ぶことを】恥じなかった (参照 ヘブル 2:11)
 - 神は彼らの神と呼ばれることを恥じなかった。
- (5) 神は、すでに用意しておられる、彼らのために、天の都を。彼らは、黙 21:2 の新しいエルサレムに、より優る家を持っている。